

Title	子どもの視点構造とアンビバレンス理解 (第4報) : Selman 理論の検証と展開
Author(s)	中瀬古, きぬ恵; 谷村, 覚
Editor(s)	
Citation	人間関係論集. 2002, 19, p.89-116
Issue Date	2002-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/2700">http://hdl.handle.net/10466/2700</a>
Rights	

## 論文

## 子どもの視点構造とアンビバレンス理解 (第4報)

— Selman 理論の検証と展開 —

中瀬古 きぬ恵・谷 村 覚

## 1. 問題

われわれはこれまで3回にわたって、社会的視点取得の発達に関する Selman 理論 (Selman, 1980) が日本でもアメリカにおけると同様の妥当性をもちうるか、またその発達過程を形式的に記述するにはどのように捉えるべきかを検討してきた (中瀬古, 1999; 中瀬古・谷村, 2000; 中瀬古・谷村, 2001)。Selman は幼児期から青年・成人期にいたる視点取得の発達過程を大きく4段階 (第0段階を含めれば5段階) に区分したが、これまでのインタビュー調査を通して、すくなくともその第3段階までについては彼の記述する各段階の特徴が日本の子どもにも同様に観察されること、ただし年齢に関しては日米間に若干の差異が認められること、および視点構造という新しい枠組みを用いて各段階の特徴をより一般的に説明できることを見てきた。本稿はこの再検討シリーズの締めくくりとして、Selman のあげる最終段階である第4段階について同様の検討を加える。

第4段階についての Selman の要約をあげておく (抄訳)。

レベル4：深層のおよび社会的-象徴的な視点取得 (12歳ころ～成人)

個人概念：深層的 (In-depth) —— 2つの新しい捉え方がレベル4の個人概念の特徴づける。第一に、行為、思考、動機、感情は心理的に決定されてはいるが、必ずしも自己反省的に理解されているとは限らない、と捉えられる。すなわち、個人内の複雑な相互作用は、レベル3での「観察自我 (observing ego)」によっては理解しきれないことがある、との見方が生まれる。そう名づけられるかどうかはともかく、個人内の無意識の観念がここに誕生する。それによって、レベル2のように個人は時に自分が「望んでいない」ことでもしてしまうとみなされるのではなく、自分がなぜ望んでいないかの理由を理解していないことでもしてしまうとみなされるようになる。第二に、レベル4ではパーソナリティをさまざまな特性、信念、価値観、態度の産物として、それ自身の発達史をもつひとつのシステムとして捉えるようになる。

関係の概念：社会的－象徴的 (Societal-Symbolic) —— 個人間のおたがいに対する主観的視点は、期待や自覚の平面上にのみ存在するのではなく、コミュニケーションの複数の層に同時に存在すると捉えられるようになる。例えば、2者間において、表面的情報のレベル、共通の関心のレベル、言語化されないより深い感情とコミュニケーションのレベルなどで視点が共有されうる。このレベル4の青年または若い成人は、いくつもの相互的な（一般化された他者の）視点を抽象して、だれもが共有しうるひとつの社会的、慣習的、法的、道徳的な視点に到達することができる。正確なコミュニケーションと相互理解を可能にするために、一人ひとりの自己はこの一般化された他者ないしは社会システムにおいて共有された視点を考慮するものとみなされる。

(Selman, 1980, p. 39-40)

この記述の要点は次のように解釈できる。すなわち、第4段階の主体は、自己や他者の視点をその内部において考慮するだけでなく、「無意識」や「発達史」や「一般化された他者」や「社会システム」などといった、外部の背景的なシステムによって規定されたものと捉え、コミュニケーションにおいてもそれらの背景的システムを考慮する、ということである。

これらの Selman の記述が日本の回答者に当てはまるか、またわれわれのいう視点構造の枠組みにおいてこの段階のさまざまな変化を全体的にどのように定式化しうるか、こうした問題を検討するために、これまでと同様のインタビュー調査を行った。

## 2. 方 法

今回の段階4のインタビュー調査は、1999年7月から2001年6月にわたり、大阪府内の2カ所、和歌山県内の2カ所、奈良県の2カ所、京都市内の1カ所、などの近畿圏で、延べ16回行った。インタビューの対象は、高校生、大学生を中心とする15歳（高1）から23歳（大学生）までの計33名である。また、今回の調査においては、付加的な調査として、中学生年齢では段階4の理解が認められないことを確かめるために、特定のトピックスについて中学3年生7人にそれぞれ10分程度の質問を行ったが、この結果は本報告にはとくにあげない。インタビュー方法については、前回と同じく Selman が標準化した質問に基づくインタビュー調査法により行い、テープ録音をとった。

前回（中瀬古・谷村, 2001）と同様に今回の調査においても、Selman と同じ例話「子犬の話」を用いた。これは、飼い犬がいなくなったことにショックを受けて「もう二度と他の犬なんか見たくない」と言う子ども（ヨシオ）に対し、友人（タケシ）が新しい子犬をプレゼントしようとしている、というジレンマ状況をめぐる話である。子犬の例話において個人の領域の質問をした後に、友人関係の領域に属する友人間の葛藤について追加的に質問を行った。

### 3. 段階4の発達的变化

今回の調査で認められた新しい特徴のうち、Selmanの段階4の記述に対応すると思われるものをまず確認し、それをとおして段階4の視点構造を考察したい。

#### 3-1. 無意識の理解

前述のように、Selmanは段階4の視点取得の基本的特徴として、「無意識」の観念の誕生をあげている。以下は、その代表的な例である。

16歳：

マイクが自分の言ったことについて考えたら、自分が本当はほかの犬をほしいと思っていることに気がつくと思う？

「つくかもしれないし、つかないかもしれない。自分の深い感情に気がつかないかもしれない」

どうしてそういうことが起きるの？

「彼はほかの犬がペパーの代わりになれることを、自分自身に認めたくないのかもしれない。心のどこかで、すぐに代わりの犬を見つけてくるのはペパーにすまない (unloyal) と感じているのかもしれない。罪の意識を感じるのかもしれない。こういう感情にはっきり向き合いたくなくて、新しい犬はいらないと言っている」

彼はそのことに気がついているの？

「たぶん、気がついていない」

(Selman, 1980, p.106)

この回答者は、例話の主人公が新しい犬を望む気持ちを自分自身に隠蔽している、と解釈している。このように個人の意識的な行為の背後に本人の気づかない感情や動機が働いていることへの理解を、Selmanは「自然な説明概念としての無意識の発見」(1980, p.105)とよぶ。それはたとえば感情に流されて我を忘れてしまうような一過性の自己忘失状態を問題にしているのではなく、「個人が自己分析に抵抗する思考、感情、動機をもちうる」(同所)ことへの理解を指している。また、そのような理解は、既存の概念枠組みでは説明できない社会的行動や経験の諸側面を説明する必要から生まれる、とされる。

今回のインタビュー調査のなかでも、いくつかの回答でSelmanのいう「無意識」の理解に相当するものが示された。

《観察1》 S. A. 18歳6カ月（大1男子）

たとえば、何かをやろうとするときに、そのやろうとすることの動機というのを、自分はこういう動機でやるのだ、というふうにそのとき思ってた、後で考えると違っていたということはありませんか。

「それはあると思います」

たとえば、どういうときですか。

「説明難しいですけど、個人的なことですけど、ぼくが陸上を始めようとしたきっかけは、体を鍛えたい、まあ運動部に入ろうと思っていたので、やったんですけど、よくよく考えたら、まあ、やって何年も経ってからですけど、父も陸上やってたんで、そういう父に負けたくない気持ちもあつたんじゃないかなあ、と。今から考えれば、そういう気持ちも、潜在的なものだと思うんですけどあって、それで、やったのかなあと思いますね。必ずしも、そのときぱつと言ってることだけがすべてじゃないと思います」

「父に負けたくない気持ち」から陸上部を選ぶ。すなわち父へのライバル意識が、陸上競技に上達したいという気持ちを駆り立てる。こういう心の動きを理解することは、われわれの《視点構造》の用語を用いれば、一次的視点間の相互作用を把握するメタ視点の取得（段階3）によって可能である（中瀬古・谷村, 2001）。だがこの例では、そうした相互作用の存在が気づかれているだけでなく、その相互作用が観察自我の目から隠蔽されたことまで理解されている。回答者の過去のメタ視点は「陸上をやりたい」という一次的視点のみを把握し、「父に負けたくない」というもうひとつの一次的視点からの影響を見落としていた。この見落としが何によって引き起こされたか（たとえば、父へのライバル意識を否定しようとする気持ち）はともかくとして、ここで回答者はメタ視点が犯した失敗を認識しており、その失敗は一次的視点とメタ視点との比較をとおして知られている。このような比較が可能であるためには、一次的視点とメタ視点との関係を外から眺める視点に立たなければならない。ここには、メタ視点を対象化して捉える外部の視点が誕生している、とすることができる。

次は、「無意識」がひとつの選択ではなく不選択をもたらした例である。

《観察2》 Y. M. 19歳10カ月（大2女子）

あのとき自分が感じたり考えたりしていたことは、ああでなくてこうだったんだ、ということはあると思いますか。

「思います」

何か例がありませんか。

「ちょっとずれるかも知れないんですけど、何かすごくやりたいことがあって、その申し込み期限が迫っていたとして、すごくそれを申し込もう、申し込もうと思っていたのに、そのときは何か、「いま、

でも、何かと用事があるからできない”という理由で申し込みをしなかった。それが後から冷静に考えてみると、忙しかったからやめたんじゃないなくて、自分がそれを申し込もうとしている仕事をやりおえる自信がなかったからやめたんじゃないかなあ、と思い直すことはあります」

そのときには気づいていなかった？

「はい」

そのときに、自分の真の感情になぜ気づかないのだと思われませんか。

（中略）

「意識的に、もしかしたら、気づかなかったというよりも、気づかないようにした、という…」

ある仕事に応募しようとする意志が、自信のなさによって妨害された。しかし、回答者の過去のメタ視点はこの視点間相互作用から目をそらした。その妨害に「気づかないようにした」のである。ここでも観察1と同じように、無意識の働きとして捉えられているのは、メタ視点による一次的視点の動機づけられた見落としである。

回答者自身だけでなく他者についても、そうしたメタ視点による見落としが気づかれる。

《観察3》 N. A. 18歳0カ月（高3女子）

下に見る子には強いけど、上に見る子には弱いとか、そういうのありますか。

「ありますね。めっちゃめっちゃ、あります」

（中略）

教師にはこうだけど、下級生にはこうだとか、同じことでも人によって極端に対応が違うとか。それはどうしてやる。

「（笑い）んー、なんでやる。ほんまになんでやる。自分が弱いからかな」

その子、分かってるんやろか、そのこと。

「分かってないと思う」

説明しても気づいていない感じ？

「言ったら気づくかも……。あ、言ったら、え、そんなことしてない、って思うかもしれない」

なんでやるな？

「..自分が弱いと分かってるからかな」

弱いから相手を下に見るのですか。

「下に見て、自分が強いんだと思いたい」（ためらいながら）

それは本人、気づいていると思いませんか。

「気づいていないと思う」

自分の弱さを感知することが、人を見下す態度を生み出すという心理的力動が理解され、しか

もその2視点の関連を主体自身のメタ視点が見落としているとの認識をしめす点で、この観察は上の2つの観察例と共通したものをもつと言える。しかし、ここで関連づけられている2つの視点は、弱さの自覚（「自分が弱いと分かっている」）と強さの錯覚（「自分が強いんだと思いたい」）という、一方の肯定が他方の否定になる不可分一体の視点であって、本来の意味で相互作用を問題にしようという別個の視点ではない。この観察は先の2つよりも未分化な移行的な例として位置づけることができるだろう。

### 3-2. 重層的システムとしてのパーソナリティ観

はじめに見たように、Selmanは段階4の《個人の概念》の特徴として、発達史をもつひとつのシステムとしてパーソナリティを捉えるようになることをあげていた。別の箇所でのSelmanの記述をまとめると、この段階の特徴は全体として統合された重層構造としてのパーソナリティ観だといえる。まず状況によって変化しやすい表面的行動のレベルがあり、その背後に比較的持続的な特性のレベルがあり、深部には個人の対人行動をつらぬく変化しにくい全体的指向が存在していて、一見矛盾する行動や特性もより基底的なレベルでは矛盾なく統一されている、との捉え方がなされるという(1980, p. 135)。残念ながらSelmanはそうした捉え方の具体例を示していないが、今回の調査では彼の記述に該当すると思われる例がいくつか観察された。

まず、「無意識」観念の例としてあげた観察3は、上の者には卑屈で下の者には横柄な友人の矛盾する特性が、本人の弱さの表れとして見れば必ずしも矛盾しないことを理解している点で、このパーソナリティのシステム観の例でもある。

次に、変わりやすい表面的な行動や性格と、変わりにくい基本的性格との重層性に関して、段階3と4それぞれに分類できると考えられる回答例を以下にあげる。

〈観察4〉 N. Y. 15歳7カ月（高1女子）

タケシ君たちは10歳なんですけど、20歳になったら性格というのは変わるとは思いますか。

「変わるとは思います」

変わるというのは、どうなってどう変わるのでしょうか。

「あんまり分からないです」

人の性格が10年間のなかで変わるには、何かを変えていくわけですね。その何かとは何でしょうか。

「学校とかじゃないですか」

はあ。

「友達が変わっていくから、そのなかで友達の付き合い方とかも変わってくるんじゃないかなと思います」

〈観察5〉 Mo. M. 16歳0カ月（高1女子）

性格というのは、変わっていくものだと思いますか。それとも、あまり変わらないと。

「変わらないと」

変わる場所もあるけど、変わらない場所もあるということ？

「変わる場所もあるけど、それは（変わらないところが）表に出てないだけであって、みな、それに気づかないと思う」

〈観察6〉 T. S. 17歳9カ月（高3男子）

ヨシオ君が弱い性格だとして、今10歳だとして、20歳になっても、その性格というのはどうなるでしょう。

「変わる人もいてるし、変わらない人もいてると思う」

それは、どうしてその違いが分かれるのでしょうか。

「僕の場合でもいいですか」

はい、もちろん。

「いい人の出会いと、出会わなかった場合というのが、いちばん多いと思います」

人との出会いね。

「はい」

これらの観察では、人は変わるか変わらないかのどちらかであって、ひとりの人のなかに変わる部分と変わらない部分があるとの分節化は見られない。これに対して、次の諸例はその分節化の点で上のものと一線を画しており、段階4に位置づけることができる。ただし、最初の観察7は、質問に促されるまでその区別に自発的には言及していないので、段階3から4への移行的反応と見られる。

〈観察7〉 K. S. 16歳8カ月（高2男子）

タケシ君とヨシオ君は10歳なんだけど、ある性格をもっていたとして、20歳になったら人の性格は変わると思いますか。

「本質的には変わらない」

変わる部分もあるの？

「はい」

表面的なものですか。

「はい」

変わるためには何の関係すると思いますか。



「一緒にいる人が違ったりしたらそういう人に影響を受けたりして、変わるかもしれない」

〈観察8〉 S. A. 18歳6カ月（大1男子）

もしタケシ君が思いやりがあるというふうな性格だとして、いま10歳ですけど、20歳になっても同じ性格だと思われますか。

「それは内面的なことですか、それとも、外に向けることですか」

まあ、両方ですね。対人でも自分に向けても。

「対人については、分からないです。やはりまわりの境遇とかによると思われますし、変わってくると思いますけど。内面的なことですか、本質的なことは変わらないと思います。やっぱり、人を思いやれる人だと思います」

〈観察9〉 M. T. 21歳10カ月（大4男子）

人の性格の形成にはどんなことが要因になっているのでしょうか。

「育った環境だと思います」

はい。タケシ君のこのでのやさしさというのは、10年後の20歳でも同じような性格だと思われますか。

「基本的には、そういう根本の性格というのは変わりづらいと思うんですけども、その間に10年間の経験があって、タケシ君もそのうち、自分の好意の勘違いにも気づいてくることがあるので、勉強していけば、そんなはき違ひも少なくなってくるかと思うんですけども、根本的には一緒と思います」

このように「本質」、「内面」、「根本」などと用いられる表現はまちまちだが、パーソナリティを重層化して捉える回答は今回調査対象とした年齢層で数多く観察され、Selmanの段階4の記述が妥当であることを確かめることができたといえる。

### 3-3. パーソナリティへの環境の影響

Selmanは、個人のパーソナリティの背後に発達史を想定するようになることを、段階4の特徴のひとつとしてあげていた。パーソナリティの形成要因に関しては、前回までのインタビューでも、例話の登場人物が成長したときにもその性格は同じままか、という質問を導入として、たびたび取り上げてきた。しかし、そのさいの回答の多くは、観察4～6に見られるように、質問された登場人物の将来を回答者自身の経験にもとづいて予測する（「友達とのつき合い方が変わる」など）にとどまっていた。「性格を作るのにどのようなことが関係するか」という形で質問すると、たちまちことばに詰まってしまうのが常であった。ある特定の個人の性格について推測したり予測したりすることは容易であっても、性格一般についての一般的な規定要因については思考困難に陥るのである。そのような前段階までの回答者と今回の回答者を比較するとき、用いられる概

念の一般性のレベルに明瞭な違いが認められる。観察例を見てみよう。

〈観察10〉 Ma. M. 19歳3カ月（大2女子）

性格はどのように形成されてくるのでしょうか。

「やっぱり、育った環境が一番大きいんじゃないかなと思います。まわりの人間にどう接せられたかとか、その中でどう振る舞うことが許されたかとか。そういう感じが大きいとおもいますね。彼（例話の登場人物タケシ）のばあい、わりかし単純な性格だとしたら、思ったことがそのまま振る舞うことが許される状況だったと思うんですよ」

〈観察11〉 Ta. K. 19歳8カ月（大1男子）

性格が成立してくるのには、どういったことが関係して、どういう経過があるのでしょうか。

「ああ、それは一番でかいのは、まわりの環境だと思います。まあ、そうですね。性格というのは、まわりの人によって決められるし、自分の捉え方によっても変わるし、まあ捉え方もまわりの環境が決めるんだろうし。まあ、そのまわりの人々や、自分の見たものが決めると思います」

〈観察12〉 Te. K. 21歳8カ月（大4男子）

タケシ君（例話の登場人物）が素直といわれましたが、性格が形作られるためには、どういったことが性格形成につながっていると思われますか。

「対人関係というか、人とのふれあいの中で、形作られていくのが一番大きいのではないかと思います。まあ、人との関わりの中でしか生きていけないところがあるので、そういう中で形成されていくのが一番だと思います。あとは環境的な問題で、家庭環境であるとか、それから、さっき静岡の話もしましたが、そういう土地の気質だとか、そういうのも。ま、家庭環境とか大きいと思いますけど。家族とかね、そういう環境」

これらの例からうかがえるように、今回の調査対象者の多くは、個々人の性格を抽象化した性格一般について思考し言語化することができるようになっている。そしてそのほとんどの回答者が、性格一般の形成要因として第一に「環境」をあげる。前段階までの回答のなかにも「環境」に言及するものがなかったわけではないが、それは具体性をともなわない単なる言及にとどまり、質問者が明確化を促しても漠然と「親の教育」や「友達関係」をあげるのが限界だった。それに対していまの回答者たちは、どのような環境要因がなぜ重要なのかをそれぞれのことばで説明することができている。一般概念とは、個別を抽象化しつつ、いつでも具体的な個別例に立ち戻ることができなければ意味をなさないが、今回の回答者たちの多くは、そうした一般概念としての「性格」や「環境」ということばを用いて自己や他者について考えることができるようになっている。

なお、今回見られた「環境」重視という特徴を、Selman は段階 4 の記述のなかでとくに指摘してはいない。パーソナリティの背景に「発達史」を想定している点では日本の回答者にも Selman の記述が妥当するといえるが、発達史において重要とみなされる要因に関しては日米間に捉え方の差があるかもしれない。

### 3-4. 段階 4 の視点構造

以上、Selman の記述する段階 4 の特徴が日本の回答者においてもおおむね妥当することを確かめたところで、この段階 4 を特徴づける視点構造とはどのようなものかを考えてみよう。

前の段階 3 においては、自己内のさまざまな視点（一次的視点）を同時的に俯瞰し関係づけるメタ視点 (meta-perspective) の成立によって、視点間相互作用が把握され、また主体の能動的意志の働きが理解されるようになった（中瀬古・谷村, 2001）。メタ視点（観察自我）は自分のなかのすべての視点に目を配っており、仮に自分で自分の気持ちをごまかすようなことがあるとしても、それはメタ視点の能動的な働き（個々の視点にたいする選択と排除）によるものとみなされていた。メタ視点において主体はつねに統一されていたのである。それに対して段階 4 になると、みてきたように、メタ視点の対象化されるのにもなって主体の統一性が疑義に付される。メタ視点はつねに能動的な主体であるとは限らず、じつはそれ自体が受動性をもち、監視や制御の及ばない内的感情や外部環境によって影響を受けているとの理解が現れて、個人の主体性の限界が認識される。

このような認識は自己の客観視という側面ももっている。メタ視点の対象化されると、いわば、自己を見る自己をさらに外から見る構図が成立する。「無意識」の項の観察（回答者自身についてのもの）はそうした構図の例でもあった。それらはメタ視点の失敗を客観的に捉えていた。一方、次の例は、メタ視点の建設的な働きを客観的に捉えている。

《観察13》 N. N. 23歳3カ月（大4男子）

ヤスオ君がちょっとしたことに落ち込むタイプだとしたら、このヤスオ君が20歳くらいになっても、同じような性格だと思われませんか。

「受けるショックの大きさにもよりますけれども、まあ、年を重ねるにつれて、ある衝撃を受けて悲しんだりする度合いは小さくなっていくと思います」

それはどうしてそうなるのでしょうか？

「いや、ほくもそうですし、やっぱり子どもの頃っていうのは、ちょっとしたことで喜んだり落ち込んだりするものだと思うんですけど、やっぱりおとなになってくると、自分に対する発言とか、まわりの行動も許せるようになってくるので、受け止められると思うんですよ」

発言とか行動、人に対して許す気持ちが大きくなるんですよ。それはどういったことからそうなる

のでしょうか？

「自分を客観的に見られるようになってくると、そうなる」

しつこくてすみませんが、自分を客観的に見られるようになって、何が分かってくるのでしょうか。

「自分がまわりの人にどう受け入れられているとか、どういうふうに思われているとか分かってくると思うので、じゃ、この人たちにこう思われているということは自分のここをこうしないといけないとか、自分のこういう面を直さないといけないとか、そういうふうに思うと思うんですよ。だからまわりの人の言うことも、参考にしていけると思うんです」

子どもは年齢が増すと「自分を客観的に見られる」ようになると捉えられているわけだが、ここで重要なのは、その「自分を客観的に」見るということの内容が、観察自我の見る自己と、まわりの人から見られる自己との不一致の認識として理解されている点である。そうした不一致を認識するためには、メタ視点（観察自我）を対象化した上で、それを他者の視線と比較する操作が必要である。「無意識」の観察と異なり、ここでメタ視点と比較されているのは自己内の視点ではなく他者のまなざしだが、自己を見る自己をさらに外から見る自己客観視の構図が成立している点は共通している。

今回の調査ではこのようにメタ視点の対象化という視点構造が多くの回答に認められたが、ではそのメタ視点を対象化している視点、自己を見る自己をさらに外から見るときの、その外の視点とはどのようなものだろうか。

われわれは段階4に生まれるこの新しい視点を、「一般化された視点 (generalized perspective)」と捉えることにしたい。ただしこれは社会通念という意味での一般的視点ではなく、主体自身はその社会生活のなかで、自己や他者についての経験や知識や反省をとおして一般化した視点である。ここで「一般化 (generalization)」とは、Mead (ミード, 1973) が「一般化された他者の役割取得 (taking the role of the generalized other)」という概念で用いたのと同様の意味で用いている。Meadは知られるように、人は他者の目を通して自分自身を振り返ったときに初めて自己意識を獲得するとし、そのことを「他者の役割取得 (taking the role of the other)」とよんだが、彼はこの他者に2つの水準を設ける。ひとつは親、きょうだい、教師などの個別的他者であり、幼年期の子どもはそれら特定の他者の目を通して自己を発見する。もう一つは他者の集合体としての社会集団という水準であって、そこでは多様な他者の役割が相互に補いあい組織化 (organize) されることによって、全体としての統一された「一般化された他者」を構成する。子どもは成長とともに、この安定した「一般化された他者」の目を通して、安定した自己の像を形成していく、というのが Mead の主張である。われわれはこれと同じように、ひとつの視点を多様な対象に未分化に適用することではなく、多様な視点を全体として組織化することを「一般化」とよび、この意味で「一般化」された視点の取得が段階4の視点構造を特徴づけるも

のと考える。

いうまでもなく、Mead は自己意識形成の媒体としての他者役割（他者視点）の取得を問題としたのに対して、われわれが問題としているのは、自己意識の成立を前提とした上での、他者理解（対象化された自己もひとつの他者とみなす）における視点取得の構造であって、Mead の概念をここにそのまま持ち込むことはできない。彼の「一般化された他者」とは異なり、視点取得の段階4で一般化されるのは、自己の視点とも他者の視点とも特定することのできない、個人の多様な視点であることは確認しておきたい。

このような意味での視点の一般化は、メタ視点の対象化と密接に相関しあった発達であると考えられる。すなわち、自己の視点が対象化されると、自己や他者の多様な視点を同一平面上で比較対照することが可能となる。その結果、それらの視点のいずれもが相対化され、どれにも一定の正当性が認められ、視点間の均衡化が探られるようになる。その均衡化した状態が、「一般化された視点」なのだといえる。そしてこの「一般化された視点」が、次の自己対象化の視点と比較の平面を提供する。単純化すればこのような図式を描くことができるだろう。

こうして到達される「一般化された視点」のひとつが、環境の影響という概念だと考えられる。それは人が社会生活のなかで経験する個人間の共通性と差異という矛盾を説明する、均衡化のための観点となる。同様に、パーソナリティの重層性の理解は、異なる状況間にみられる個人のさまざまな行動の共通性と差異を説明する均衡化の観点となる。段階4では、それらの「一般化された視点」とおして、さまざまな背景要因による主体の被規定性が認識されるのである。

#### 4. 視点の一般化の諸過程

視点の一般化は、いま述べたように複数視点の比較対照をとおして達成されることが考えられ、そのためにはまず、ひとつのことがらに対してつねに複数の視点がありうるということが認識されなければならない。状況の異なる側面に注目する複数の視点（段階2）ではなく、ひとつの状況全体に対する主体の統一的視点（段階3）が複数ありうること、そしてそのどれにも一定の正当性や必然性があることが理解されなければならない。今回のインタビュー調査では、どのような質問に対しても、「一概にはいえない」、「時と場合による」、「私ならこうする。だが別の選択もありうる」といったたぐいの回答がたいへん多く聞かれた。それは前回の段階3までの調査ではほとんど目立たなかった反応である。そのような相対的思考のいくつかの類型のみを、以下にあげる。

#### 4-1. パーソナリティの多義性

Selman (1980) は、視点取得の段階3において特性集合としての変化しにくいパーソナリティという概念が形成され、段階4では、前述のように、パーソナリティの可変的、非一貫的な部分と不変的、一貫的な部分とが層的に分離されることによって、全体としての統合的理解が達成される、とみなした。われわれの今回のインタビュー調査でも、すでに見たようにパーソナリティの重層性の理解はたしかにこの段階の特徴として確認されたが、それよりも若干早期の年齢において、パーソナリティの非一貫性、というよりも多義性とよぶべきことがらの理解が、いくつかの観察で示された。パーソナリティの多義性の理解とは、ひとりの個人に対して複数の視点を取りうることの理解にほかならない。

〈観察14〉 S. M. 15歳1カ月（新高1女子）

「私の場合はまわりにいろんな人がいたんです。自己中の人もいれば、まわりの人の気持ちも考える人もいれば、やさしい人とか、普通の人とか、いろいろいたけど、みんなから学ぶことがあって。悪い人は悪い人、と初めそう思っていたこともあったんですけど。自己中の人とかは。最終的には、みなすごいいい子というのが分かって、みんなからいろんなことが学びとれた」

（中略）

じゃ、ある性格っていうのは、他の面もあるということ？ 一つの顔だけじゃなくって、自己中のときもあるし、やさしいときもあるというような？

「自分が見ているのは単に一面で、他のところでは違う顔を見せているかもしれないので。ただその一面だけで人の性格を判断したりするのはやめよう、って」

ここに見られるのは、「自己中」と「いい子」との非一貫性にたいする戸惑いではなく、またその階層性の理解でもなく、ひとりの個人のもつパーソナリティの多義性にたいする自覚的な姿勢である。パーソナリティの多面性についての経験が一般化されつつある。この回答者は他の回答も考慮すれば全体として段階3に位置すると判断されるが（前報でもインタビュー対象とした）、上の観察には段階4への移行の兆しが認められる。

〈観察15〉 H. T. 17歳3カ月（高2男子）

となると、タケシ君の性格はどうですか。

「これだけ見たら、分からないと思うんですよ。一概には言えんと思うけど、ヨシオくんにとってはやさしいと感じ取られるかもしれないし、けど、もしかしたら、ほかの人から見たら、タケシ君は違うふうな性格とか見えるかもしれないし。人それぞれだと思う」

（中略）

人の性格というのは、やさしい人とか、そういった言葉で言えるのでしょうか。

「その場面で、どういうふうな性格だと言われたら、そういうふうに言われるかもしれないけど、自分の気持ちを出せないでいる人がいたら、そういうふうには分かってもらえないだろうから、その場面でどういうふうな性格だと決めつけるのはおかしいと思うんで」

場面というのは、行動ということですか。

「行動もあるし、ふだんから、見せる一面というのも見る人によって様々だと思うし、だからそこで違うと思うんです」

(中略)

たとえば、Hくんはこういう性格だと、なかなか一言では言えない？

「言えないですね」

たとえば、ある人が温かい、残酷、冷たい、などと一緒にもっていることはありますか。

「見方にもよるし、どういうふうに動いているかっていうのも、相手にはどういう風に見えるかっていうのも違うし、どういうことをしてても、ある人から見たら、ああ、いいことしてるな、って見えても、違う人からみたら、よくないことや、って思うかもしれんし」

個人のなかには多様な側面があって、相手によって異なる側面を見せたり、見せたくても見せられなかったり、さらに同じ行動でも見る人によって受けとめ方がまったく違ったりする、ということが十分に理解されている。パーソナリティの多面性と多義性が確実に理解されている。その多義性に統一的な見通しを与える「一般化された視点」はまだ獲得されているとはいえないが、すでに段階4への移行が始まっている例と位置づけられる。

《観察16》 M. Y. 19歳7カ月 (大2女子)

まっすぐな性格ということばでタケシ君の性格を表現できると思いますか。

「できないと思います。やっぱり、ここでしか見えない面というのものもあるし、他に行ったら違うというのものもあるし、人間の心の中って複雑だから、一つでくくれないと思うんですよ。こういう面も、こういう面も、こういう面もあって、一人の個人だと思うんですよ。だから、一言でくくるのは無理だと思います」

そのこういう面、こういう面っていうのが、たとえば、まっすぐな性格とゆがんだ性格とかね、もしくは、やさしい性格と残酷な性格とかね、そういうのが共存しうると思いますか。

「共存しうると思います。物事に対して、このことに対してはこういう性格が出るけど、こっちに対してはこういう性格が出るとか、この人の前では強気でいられるけど、こっちの人の前では自分の意見をはっきり言えないとか。そういう状況とか、環境とか、相手とかによって変わる面があると思うんです」

そういうなかにある種の一貫性とか、統一性があるのですか。

「あると思います」

この例には、多面性が人間に固有のあり方であるが、その背後には個人特有の一貫性もあるとの一般化された認識が認められ、パーソナリティの重層性への理解の一端も示されているといえる。上の3つの観察は、パーソナリティの多義性の認識、すなわち人のパーソナリティに対してはつねに複数の捉え方があることの認識が、そうした一般化された理解の出発点にあることを示唆している。

次の観察は、パーソナリティの多義性が Selman の言うような重層性に解消されることなく、どこまでも多義性として理解される場合があることを示している。

《観察17》 T a. K. 19歳8カ月（大1男子）

ある人がこういうパーソナリティだというふうに、人のパーソナリティってつかめると思われますか。

「ああ、パーソナリティは正確には、完璧に正確には絶対につかめないけど、表面的な、ふだんその人が見せてる面だけを言うんだったら、一応ことばでは、まあ正確にはではないけど、おおまかに大半は表せると思う」

なるほど。すべてを把握しているわけではないですね。

「ああ、それは無理です」

内的なものとか外的なものというふうな面も？

「そうですね。だいたい、俺が見るのは外的なもので、内的には絶対に、その人のパーソナリティというのは第三者が言うのは無理だし、本人にもちょっと無理かな、と

本人にさえ、つかめないのですか。

「はい」

この項の最後に、パーソナリティの多面性の理解が不明確な状態からより明確な状態への変化がインタビューの経過中に生じた例をあげておく。それは文字どおり移行初期の様子をしめす観察例といえる。

《観察18》 H. R. 16歳11カ月（高2男子）

その人がやさしいというのと、冷たいというのと、両方もってるというのはあると思いますか。

「裏の部分もある、そういうことがあるかもしれません」

（中略）

ある人がやさしくて冷たい、気短で気が長い、こういうのを一緒にもっている？



「いや」

気短な人は気短？ 気の長い人が気短な面も持っているということは考えられませんか。

「ないと思います」

たとえば、車の運転には気が短いけど、勉強するときは気が長い、とか。

「それはあると思います」

一つのことに対しては、気が短いなら気が短い、そういうことですね。

「(無言)」

相手をかえれば気が長くなったりするってこともあると思いますか。

「(無言)」

こういうことには気が短いんだけど、こういうことには気が長いなあとか、ある？

「あると思います。みんな気が短いところも、気が長いところもあってると思います」

#### 4-2. 感情の多義性：アンビバレンスの終息

われわれはこれまでの3回の報告で、毎回アンビバレンス（両価感情）理解の発達に注意を向けてきた。定点観測の定点のようにそれを用いてきたのである。今回はその最終観測にあたる。

段階3のインタビューでは、正と負の対立的な感情が同一対象に向けられうることの理解を示す「複雑な感情」という表現や、意味的にそれと同等の回答がしばしば聞かれた（中瀬古・谷村，2001）。その段階で、本来の意味でのアンビバレンス理解はひとまず完成状態に達したものと考えられる。それでは、段階4においてはアンビバレンス理解になんの進展も見られないのだろうか。Selman（1980）によれば、この段階でのアンビバレンスは葛藤感情がただ混じり合った状態としてではなく、葛藤感情が統合されて、質的に他と区別される独自の心理的経験として捉えられるようになるという（p.135）。しかし、彼が具体的な観察例をあげていないこともあり、今回の調査ではこの記述に該当すると思われる回答を見出すことはできなかった。だが、別の点において、混合感情の理解に関して段階3からの変化が認められた。

《観察19》 S. A. 18歳6カ月（大1男子）

怒りと愛情、楽しいと楽しくない、そういう正反対の気持ちを一度に感じることは他でもあるでしょうか。

「ああ、あるんじゃないですかね」

何か例でも。

「たとえば、すぐ手に入る楽しみ、ゲームとかあるじゃないですか、そういうのやってるときに、ふと考えたときに、楽しんでやってるんだけど、心はさめてる、みたいな」

そういう入り混じった感情というか、感情が複雑に混じり合うというのはまれなことでしょうか、そ

れとも日常よくあることでしょうか。

「日常、よくあることだと思います」

人の感情というのはどんなふうにあるのだと思われますか。

「やっぱり両極端のもので、一緒に含んでるんじゃないですかね」

両極端の感情でもいっしょに含んでる？

「一緒に同時に存在するんじゃないですかね。その量が多いか少ないかは別としても」

そういうのが通常感情である、ということですか。

「通常かどうか分かりませんが。うれしいときにうれしいだけの感情だけというものもありますけど、必ずしもそうではない、という..。ぜったい、混じってる時の方が多と思います。具体的には、ぼくはクラブで陸上やってたんですけど、走ってたら苦しいじゃないですか。いやになるじゃないですか。けどもやっぱり、なんか、走っていたら楽しい、というのがあるんですよ。苦しいけど楽しい、そういうのもあるっていう..。たぶん、感情はぜったい、なにか、二つもしくはそれ以上存在してもおかしくない。それでもふつうだと思います」

《観察20》 G. K. 23歳5カ月（大4男子）

感情というのは単一の、うれしいとか、悲しいとかいう言葉で表現しきれるものだと思いますか。

うれしいときはうれしいだけ、とかいう感情の感じ方についてどうですか。

「それはね、一般的に、うれしいと言っているときは、うれしいの度合いがいちばん大きいからうれしいと感じているだけで、実はどの感情の度合いもゼロではない。ずばぬけて、うれしいの度合いが高い数値であるときに、うれしいと感じて、もちろんだから、フィフティフィフティでうれしいと悲しいとがあるときは、複合して感じるものやと思いますけど。どれもゼロになることはないでしょう」

なるほど。それが通常感じ方ですか。

「感じ方だと思いますね」

《観察21》 M. Y. 19歳7カ月（大2女子）

感情というのは通常、どういうふうな感じ方をするとおられますか。つまりは、うれしい、悲しい、というような単一の形で感じ取られるものなのか、それとも、ないまぜというか、混じり合って受け取られるのか、ということですが。

「あんまり、そんな単一の形で感じているとは思わないんですけど。なんか複雑な感じがします」

それは、通常そういうことだということですか。

「ほんとにうれしいときはうれしいと思うんですけど、それだけの感情じゃないと思うんですよ、自分にとっては。それが何かって言われたら、よく分からないんですけど。やっぱり単一じゃないなと思います、普段から」

それはMさんの感じ方じゃなくて、一般的にもそうだと思いますか。

「そう思います」

感情がそのように混じり合うというのは、どうしてだと思われませんか。

「やっぱり、普段の生活からの…。一つじゃない気がするんですよ、ものを感じるというのは。たとえば、白い紙を見たときに、あ、白いな、というだけじゃなくって、他にも、四角いとか、大きいとか、いろんなものが見えてくるじゃないですか。感情もそれといっしょで、一つのものじゃなくって、いろんなものがいっしょに見えてくるんじゃないかなと思います」

いろんな側面を見るということですか。

「はい」

観察19では対立的な感情が複合する具体的な例があげられ、観察20の回答者は感情の混合状態を数量的なことばで表現し、観察21ではものごとにはかならず複数の側面が存在することの比喩を用いて複合感情の必然性が説明されている。これらを初めとして今回の調査では、つねに正負の矛盾する感情を問題にするとは限らないが、複合感情を特別な状況におかれたときの経験ではなく、むしろ日常的な経験とみなす見解が多く回答者から聞かれた。前段階では子犬の例話のような特定の場面を与えられたときに複雑な感情を予想したり、自分の経験のなかから類似の例を1、2あげたりすることはできたが、それを一般的な経験と捉え、単一感情をむしろ例外的とみなす回答は見られなかったものであり、この点に現段階の大きな変化が見出される。前報（中瀬古・谷村, 2001）でみたように複合感情の理解はメタ視点によってもたらされるものだが、現段階ではメタ視点の多様な経験が一般化されるということのひとつの帰結をここに認めることができるだろう。もはやアンビバレンスは特殊な感情状態ではなく、感情の通常の変遷のなかのひとつとみなされ、その意味で特別な感情としてのアンビバレンスはここに終息を迎える、ということもできる。

このように複合感情を常態として捉えるようになると、観察自我に対する自己の不透明性も当然の事態とみなされるようになる。

《観察22》 Ma. M. 19歳3カ月（大2女子）

自分の感情はこうだというふうに把握できる、もしくは把握しきれない？

「自分の感情を自分で把握できるかですか」

はい。

「できません。私にはできません」

一般的にはどうですか。

「一般的には、そうですね、やっぱり一番大きな感情というのは、絶対単一ではないけれども自覚はできるだろうと思うんですよ。でも単一ではありえないと思うから、他のいろいろな感情とか、すべ

てを考えていくと、すべてを把握することは不可能だと思います」

この例との比較だけのために、観察自我の働きに信頼を寄せている段階3に分類される反応例をあげておく。

〈観察23〉 O. S. 19歳6カ月（大2女子）

自分の感情というのは、自分でわかりますか。

「わかる」

自分は自分の感情を、全部把握できるのだろうか。

「できると思います」

一般的に？

「はい」

Oさんも？

「自分もわかっていると思います」

#### 4-3. 仮説的視点取得

一般化された視点は本質的に多角的、複眼的な視点である。それは、ことがらに対するあるひとつの見方のみを正当とみなすのではなく、異なる見方にも一定の正当性ないしは必然性があることを認める。自分とは異なる判断や選択にも、それなりの理由を想定することができる。

〈観察24〉 K. M. 22歳4カ月（院1男子）

Kくんがタケシ君だったら、どのようにされますか。

「タケシ君の気持ちをくんでほくだったら、ということですか。それとも、ほくだったら、ということですか」

そうですね。じゃ、Kさんの考えで、タケシ君だったらどうされますか。

「ほくがタケシ君の立場だったら、子犬は買いません」

（中略）

たとえば、こういったときに買うという選択をする人も中にはいると思われませんか。

「はい」

それはどういったことからそういう選択をするのでしょうか。

「そうですね。買うという選択をする人は、まあ単純に考えれば、犬がいなくてさみしいヨシオ君に、犬をあげることでそのさみしさを紛らわすというのは一番単純な考え方で、そういう考えであげる人はいると思うんですけど、その人は犬を飼った経験がない、犬を失った経験がない、とか、そういう経験の差からくるものだと思います」

《観察25》 M. Y. 21歳10カ月（大4男子）

Mくんがタケシ君だったら、犬は買いますか。

「まず、犬は買わないと思いますけど..。自分のかわいがっていた犬が死んじゃってから、すぐ他の犬をもしもらったとしても、すぐ割り切れないから、すぐ好きになれないと思う。やっぱり、そういうことを考えると、タケシ君は犬を買うべきじゃないかなと思います」

（中略）

はい、分かりました。

「でも、もしタケシ君がヨシオ君に犬を買ってあげるんだったら、それはすごくヨシオ君のことが好きなんだなあと思いますけど」

どうい感じですか、あえて、犬を買うときのタケシ君の気持ちは。

「もしかしたらがっかりしちゃうかもしれないけど、犬見たくないと言ってたのに買っちゃったら、がっかりしちゃうかもしれないけど、もしかしたらヨシオ君のためになるかもしれない、っていうふうに思って買ってあげたのかもしれないから、そういう気持ちは評価できる。ていうか、タケシ君のそういう、リスクを犯してまでも喜ばしてあげようというところは、評価できるんじゃないかなと思います」

どちらの観察でも、回答者は自分とは異なる他者の選択を説明するときに、自分とは異なる他者自身の視点に立つことができている。観察24では他者の経験の差が、観察25では他者の心情がその理由としてあげられるが、いずれも回答者自身には（すくなくとも回答時点で）当てはまらない理由となっている。段階3に位置づけられる次の観察と比較すれば、違いが見やすいだろう。

《観察26》 Y. Y. 16歳9カ月（高2男子）

Yくんがタケシ君だったら、買わないんですね。けれども、買うという選択をする人も中にはいると思いますか。

「はい」

その場合はどのように考えて、買うという選択をすると思われますか。

「新しい犬で、気持ちを紛らわせてもらったら（と考えて）」

他者が子犬を「買う」であろう理由としてこの回答者があげている「(ヨシオ君の) 気持ちを紛らわせ」という視点は、回答者自身が買うか買わないかの選択を求められたときにもまず考慮したはずの、考慮した上で抑制したはずの視点である。つまりこの回答者は、自分と明確に異なる視点には立たずに、自分と異なる他者の選択を説明しようとしている。

自分と異なる選択を十分に説明するためには、他者の自分とは異なる視点を仮説的に設定し、その仮説的視点 (hypothetical perspective) から当の選択を導き出さなければならない。観察24

と25ではそうした仮説的視点として経験の差や特別な心情が想定されているのであり、それに対して観察26では、回答者本人に当てはまらない仮説的視点の取得が欠如している。ここに段階3と4の大きな違いが認められる。

次の例では、行為の選択ではなく評価に関して、自分とは異なる仮説的視点を取得されている。

〈観察27〉 T a. K. 19歳8カ月（大1男子）

パーソナリティについてですが、ヨシオ君に犬を買ってプレゼントしようとしたタケシ君は、どういう性格だと思われますか。

「ヨシオから見たタケシですか」

そうですね。それか、客観的に見たタケシ君でもいいですが..。あ、ヨシオ君から見たタケシ君でもおもしろいですね。その前提でもいいですが。

「ヨシオから見たタケシは、素直でいいやつ、みたいなもんですか」

じゃ、客観的に見て、外から見てどうですか、タケシ君は。

「タケシは、ちょっと一般常識がなさすぎる」

それはどういうことから？

「ああ。なんか、短絡的に犬をあげてしまおうというところは、あとさき考えてなくて、ちょっとあぶない」

回答者本人はタケシを「一般常識がなさすぎる」と見ているわけだが、そのような第三者的視点からの評価とは別個に、ヨシオからの評価、つまり当事者の視点に立った評価がありうること、それも正当性をもつことが理解されている。社会的視点と個人的視点がともに相対化されている、と言えるだろう。

## 5. 主体の位置

一般化された視点の取得が段階4の視点構造だとすれば、自己固有の視点をもつはずの主体は、この段階でどのような位置づけを与えられるのだろうか。

自己の客観視がこの段階の大きな特徴であることは第3節でみた。メタ視点（観察自我）を対象化し、自己を見る自己をさらに外から見る「一般化された視点」の取得が、その視点構造であった。この客観視が行き着くところ、主体の自己は観察自我に対して自律的客体という性格を帯びはじめ、それとのあいだに距離を生じるように見える。

〈観察28〉 G. K. 23歳5カ月（大4男子）

もし、Gさんがタケシ君だったらどうされますか。

「ほくだったら、犬を買わずに他のものをプレゼントすると思うのですが」

それはどうしてですか。

「どうしてやろね。ほくもどうしてやろと思ったんですけど..。そうですね。まあ犬をね、やっぱりペットを友達にあげるということを、ほくは好まない、ということもあるしね。ヨシオ君の立場やっても、他の犬はほしくないと思いますね」

好まないということはどういうことですか。

「誕生日のプレゼントにするのに、生き物をあげる、動物をあげることがいや、と考えているんで、たぶんペットはプレゼントしないだろうと.. (中略) ..ほくも犬を飼ってたことがあるんですけど、そういう場合は、人からもらったりとか、迷い犬とか迷い猫ね、餌やったりして自然にいついちゃって飼ってるっていう..。動物と人とのつき合い、じゃないですけど、そういう形から入ることが自然だと思っているので。だからね、ペットショップで金銭で買って、それをヨシオ君にプレゼントすることは、理解できないことはないんですけど、生理的に嫌なんだろうね、その行為は」

この回答者は、自分ならプレゼントに犬を買わない、そもそも生き物はプレゼントにふさわしくない、とまず回答し、理由を質問されてはじめてその回答に導かれた自分自身の思考回路を辿りなおそうとしている。「ほくもどうしてやろと思ったんですけど..」や、「生理的に嫌なんだろうね」といった人ごとのような口ぶりには、自己の思考過程が自分自身にとってもつねに明白ではないとの認識、いいかえれば観察自我に対する自己の不透明性の認識が端的に表れている。ここでは《無意識》のところで問題にしたような「自己分析に抵抗する思考、感情、動機」が関わっているわけではなく、単純に、自己内部の視点間相互作用について直接的には把握しにくい場合があることが自覚されている。ある意味で、自己も他者と同等の存在に一般化されている、ともいえる。

思考や視点間相互作用は自己内部で進行するだけでなく、いうまでもなくつねに外部に開かれている。次の例では、回答者はその外部との視点間相互作用を客観的なできごとのように観察し、われわれの想定している「視点の一般化」プロセスそのものを感知しているようにさえ見える。

《観察29》 Ma. M. 19歳3カ月 (大2女子)

自分の本心が分からないということがあると思いますか。

「自分の本心が自分で把握しきれないということがあるかということですか」

はい。

「それはあると思います」

それはなぜ起こるのですか。

「やっぱり、日常的にいろんな視点でものを考えて、いろんな視点に立って、自分がいちばんいいと思うところで、選択して生活してると思うんですよ。自分が本当に何を考えているかということと、一般的に考えてどうであるか、たとえば目の前にいる相手がどう思うかとか、いろんなことを秤にかけて、自分がいちばんいいと思ったことを選択していると思うんですよ。言ってみれば、いろんな選択が同一線上に並べられて、秤に掛けられることになると思うんですよ。そうすると、だんだんだんだん、自分の視点とまわりの視点との差が薄れてっちゃうと思うんですよ。そしたら、はたして自分の視点はどこだったんだろう、というのがあるんじゃないかなと思うんですよ。だから、分からなくなっちゃうんじゃないかなと思うんですよ」

このように自己を客観視し、ある意味で客観視さえするようになった主体が、自己の主体性をどのように再定義し、また現実化していくかの問題は、今後検討していくべき大きな問題のひとつである。

## 6. 友人関係の領域における一般化された視点

「一般化された視点」の取得という視点構造から生まれる、個人の心的生活についてのさまざまな新しい捉え方を見てきた。段階4の友人関係の捉え方にも同様の視点構造の反映が見出せるだろうか。紙数の許す範囲で見たい。

今回のインタビュー調査では、友人間の相互理解の可能性についての認識に、段階3と4の特徴的な違いが認められた。まず段階3と判断される観察をあげよう。

《観察30》 H. R. 16歳11カ月（高2男子）

友達同士の関係で、何か行き違い、ケンカが起こるといのは何が原因で起こると思いますか。

「考え方とか、性格が違うとか」

それはどちらかが悪いというようなことなのですか。

「両方とも、思ってることとかがぶつかったら、どっちが悪いというのはないと思う」

考え方がおたがいに、実はこんなふうに思ってるんやというように話し合いをしたとしたら、解決がつくと思えますか。

「おたがい納得できれば解決できると思います」

だいたい、どんな問題もしっかり話し合えば、解決できると思いますか。

「はい」

どんなに話し合っても解決できないことがあるとは思いませんか。

「すべてがそうでないとは思いますが」



話し合っとうまくいかんかった、というケースはどういうことが原因だと思いますか。

「よっぽど強い考えか意志をもっていて、一歩も引かん状態だったら」

この例にみられるように、友人間の葛藤はすべて話し合いで解決がつくものであって、そのためには当人たちが相手の意見を聞き入れる柔軟性をもちさえすればよい、との見解が、段階3とみられる回答者たちの典型的な反応であった。Selman (1980) も段階3の友人関係の捉え方に関して、話し合いによる相互理解への信頼を大きな特徴としてあげている。それに対して、以下は段階4と判断される観察である。

《観察31》 M. T. 21歳10カ月 (大4男子)

どんなに話し合っても解決できないことはありますか。

「それはありえると思います。どちらの意見も正しくて、おたがい認めあっても、葛藤が生まれるとき、生まれないときというのはあると思うんですよ。それは相手の考え方だけでなく、人間性といった部分が一番大きい原因だと思うんですが。同じことばが話す人によって捉え方が違ってくるんですよ。ことばの重さとか。だから」

そういった場合はどうやって収まりをつけるのですか。

「つかない場合もあります」

《観察32》 K. M. 22歳4カ月 (院1男子)

相手が悪いことなんかでなくて、しっかり話し合っても乗り越えられない部分があるとお考えですか。

「話し合っ、しっかり相手のことを理解した上で、自分とは違うなっていうふうに、相容れない、ということはあると思います」

そのときの折り合いのつけ方はどういうことでしょうか。

「ちゃんと相手を理解した上で、この人はこういうことをやってる人だとか、自分はこういうことをやっていくから別、ある意味で別な方向に進んで行くから、っていうふうに。その人の存在を認めた上で、自分とは違うというように折り合いはつける。反発しあうのではなくて、ということ」

何らかの相手との解決策をつけないといけないときは、妥協というのがありますか。

「自分の真意はしっかり持ったうえで、円が2つあって、まん中が重なる部分は妥協できる部分で」

この2つの観察では、友人間の葛藤が当人たちの意図や努力ではいかんともしがたい部分を持ち、話し合いによる相互理解には限界があるとの認識が示されている。段階3とは対照的ともいえるこのような回答が今回の調査では数多く観察され、これが段階4を特徴づける一般的な認識であることがうかがえる。ただし、Selman (1980) は段階4のこうした話し合いによる問題解決可能性への信頼の低下についてはとくにふれていない。

この新しい認識の背景には、これまでみてきたのと同様の視点構造を読み取ることができる。自己や他者の観察やさまざまな社会的経験をとおしての「視点の一般化」は、必然的に、人間同士の普遍的な共通性ととも、個人差や文化差などの差異の乗り越えがたさにも目を開かせることになる。その差異を説明する「環境」などの一般的概念も用いられるようになることはすでにみた。それゆえ、友人関係における相互理解の限界について認識は、個人の心的生活における主体性の限界についての認識と地続きの変化だといえる。

話し合いによる相互理解への期待の低下は、ネガティブに捉えるべき変化ではない。それは現実認識の深化でもあって、他者への依存性を抑制し、個人の独立性を高めるとともに、Selman（1980）も指摘していた「一般化された他者、ないし社会システム」という新しい水準の信頼システムへの移行を促す変化だと考えられる。

次の最後の観察では、そうした新しい質の対人関係をうかがうことができる。

《観察33》 M. Y. 21歳10カ月（大4男子）

たとえば人からプレゼントもらって、セーターならセーターをもらって、その柄があまり気に入らないときに、どんな感情をもつでしょう。

（中略）

「自分がその柄を気に入らなかったというのを、もらった相手に読みとられたくないし、だからすごく笑おうとするとします。それはそんな失礼なことじゃないと思うし、人にそういう心理を見せないというのは、失礼というよりむしろいいことだと思うから。それから、その柄を好きになっという、という意志があればいいんじゃないかなと思います」

笑う段階で、相手の好意そのものを受容するという備えが表れているのですね。

「はい。だからこそ笑って、自分がそういうふうを受け取る準備ができているし、そういう自分の心理が分かっているから、人にはまず心理を見せずに笑って。そういうふうになれば穏便にすすんでいくというか、おたがい、そういう、真に深いところまで探り合わずにすむから」

## 7. 段階と年齢

今回の調査で得た年齢に関する結果をまとめておく。今回の調査対象は、15歳1ヶ月から23歳9ヶ月の総数33名であった。このうち、1名については2年の期間をおいて、2度、同じ調査をした。そのため、観察数は34件となる。その年齢内訳は15歳が2件、16-17歳が8件、18-19歳が11件、20-21歳が7件、22-23歳が6件である。男女の内訳は男性18名、女性15名（重複者1人を加えれば女性16件）である。34件中、段階3に属すると判断されたのは10件、年齢範囲は15歳1ヶ月から22歳11ヶ月であった。段階3から段階4への移行期に属すると判断されたのは、16

歳8ヶ月から18歳0ヶ月の5件であった。そして段階4に属すると判断されたのは17歳3ヶ月から23歳9ヶ月の19件であった（縦断観察の1名2件はいずれもここに入る）。

## 8. 結 論

Selman (1980) が社会的視点取得発達の最終段階として記述した段階4に関して、日本のサンプルでも同様の段階を認めることができるかどうかを《個人》の領域を中心に検討した。インタビュー調査の結果、Selman が当該段階の特徴としてあげた無意識の理解、およびパーソナリティを発達的に形成される重層的システムとみなす捉え方が、17歳から23歳（調査対象の上限年齢）の回答者に広く観察され、その年齢範囲は前報でみた段階3の年齢範囲に後続するものであるので、前段階までと同様、彼の段階4の記述はおおむね妥当であることを確認できたといえる。ただし段階の開始期に関しては、本研究のこれまでの知見とは整合性をもつものの、Selman の記述する年齢との間に大きなずれがあり、同様のずれが見出された段階3と併せて、今後さらに検討を必要とする。

各段階の特徴を形式的に記述しようとするわれわれの《視点構造》の枠組みにおいては、段階4は「視点の一般化」によって特徴づけられるものと考えられる。ここで「一般化」とは Mead, G.H. の「一般化された他者」の概念におけると同様に、多様な視点の組織化という意味で用いるものであって、個人が自己の個人的視点を対象化し、それを他者たちの視点と比較対照することを通して相対化し、徐々に多様な視点間の均衡を探っていく過程を想定している。Selman が段階4の特徴としてあげた無意識の理解や、パーソナリティの重層性および環境の影響についての認識は、この視点の一般化からの帰結として理解することができる。さらに、これまでと同様に今回の調査でも Selman が段階4に関してとくに言及しなかったいくつかの特徴的傾向が見出されたが、それらも視点の一般化という構造的変化の表現とみなしうるものであった。その中には、パーソナリティの多義性の理解、多義的感情を常態とみなす理解、仮説的視点取得、また友人間の相互理解の限界についての認識などがある。

全体としてみれば、他者の個人的視点の取得に関しては、先の段階3でメタ視点が成立したときにひとまず発達が完了したといえるかもしれない。段階4の発達は、他者（対象化された自己を含む）への理解がたんなる内面についての理解にとどまらず、その内面が他者自身の自覚の外部から規定されていることへの理解におよぶところにある。その自覚の外部を視野に収める視点が、一般化された視点なのである。こうして段階4の主体は、無意識や個人的動機から社会システムにいたる可能なすべての視点を取得可能となり、必要に応じてそれらの間を自由に移動しながら自己、他者、社会について思考を展開していく。この視点の自由移動こそが、社会的視点取得の構造的完成のしるしといえるだろう。

われわれはこれまで、統一性をもつ主観的反応（思考や感情）をひとつの視点とよぶことを出発点としたうえで、内的視点の理解が不分明な幼児期から始めて、単一視点の取得の段階（約6～10歳）、視点の二重化の段階（約7～13歳）、メタ視点の取得の段階（約14～17歳）、そして今回の視点の一般化の段階（約17歳以上）と発達過程を跡づけてきた。この一連の報告をとおして、視点構造という枠組みの有効性を十分に確かめることができたと考える。これを第一段として、今後はより系統的な調査によって段階と年齢の関係を明確にすることをはじめ、各段階の視点構造が他の Selman 課題（とくに友人関係の領域）や、Selman を離れて他の社会的発達の諸側面においてどこまで広く主題一般性や領域一般性もちうるかを確かめ、他の認知発達との関連を探り、文化差や移行期の問題をとおして経験要因の影響について分析する作業などが、ただちに着手すべき研究課題として残されている。

## おわりに

人間の進化的特徴についての近年注目を集めている見解によれば、人間は自己の内面をのぞき見ることのできる《意識》をもったことにより、心について、すなわち状況と内的経験と行動との関係について一定のモデルを形成することが可能となった。これによって、人間はある状況である行動をとる他者の心を、すなわちその思考や感情を自己に照らして類推する力を獲得し、それが人間同士の協力関係を飛躍的に発展させて、高度に組織化された社会の成立をもたらした、という（ハンフリー, 1993; リーキー, 1996）。本研究で問題としてきた社会的視点取得とは、このような自己観察にもとづく他者の内面の類推的理解にほかならない。その能力は個人の家族関係や友人関係から国家や文明間の関係にいたるすべての水準における人間の社会的行動の根底をなし、またその発達過程はおそらくすべての社会的発達と不可分に関わっている。このように広大な裾野をもつテーマの研究にひとりでも多くの研究者の参加を呼びかけて、今回の一連の報告に一区切りを設けることとする。

## 文献

- ハンフリー (Humphrey), N. (垂水雄二訳) 1986.『内なる目』紀伊国屋書店. (*The inner eye*, 1986, Faber and Faber, London.)
- リーキー (Leakey), R. (馬場悠男訳) 1996.『ヒトはいつから人間になったか』草思社. (*The origin of humankind*, 1994, BasicBooks.)
- ミード (Mead), G.H. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳) 1973.『精神・自我・社会』青木書店. (*Mind, self and society*, 1934, (Ed.) Morris, C.W. The University of Chicago Press.)

- 中瀬古きぬ恵 1999. 子どもの主観（視点）構造の発達段階とアンビバレンス理解 —— 日本でのインタビュー調査に基づく Selman の視点取得段階理論の再検証. 大阪女子大学人間関係論集, No. 16, 139-161.
- 中瀬古きぬ恵・谷村覚 2000. 子どもの視点構造とアンビバレンス理解（第2報） —— Selman 理論の検証と展開. 大阪女子大学人間関係論集, No. 17, 117-144.
- 中瀬古きぬ恵・谷村覚 2001. 子どもの視点構造とアンビバレンス理解（第3報） —— Selman 理論の検証と展開. 大阪女子大学人間関係論集, No. 18, 89-111.
- Selman, R.L. 1980. *The growth of interpersonal understanding: Developmental and clinical analyses*. Academic Press.